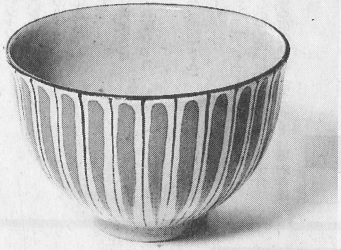
そばに置きたい

母から子へ つながる絵付け



小春花製陶の赤楽麦藁手のどんぶり　直径15㌢、高さ9・6㌢で税抜き3800円。問い合わせは久野さんが関わる民芸店「手しごと」（電話03・6432・3867、火曜定休）。

外山亮一撮影

愛知県瀬戸市に優れた絵付けの技を持つ人がいました。「小春花製陶」の加藤万佐代さんです。瀬戸焼の工房の跡取りの俊次さんと結婚して40年、絵付けを専門に技術を磨きました。

「赤楽麦藁手」は、朱を帯びた「赤楽」の線を黒く細い線の間に描きます。線は等間隔に引かれ、器の縁から底の一つの点に吸い寄せられるように描かれます。ぼってりとした線が縁から底にすぼまる具合が麦の穂に似ていることから、その名がついたと言われます。

何十年もの間、繰り返してきたからこそ、バランス感覚が磨かれたのでしょう。この絵付けができる描き手は万佐代さんだけでした。残念ながら2013年秋、急死してしまいました。工房を継いでいた俊次さんも後を追うように亡くなりました。

現在は息子の宏幸さんが絵付けをしています。万佐代さんと一緒に工房で仕事をしていましたが、はじめは母親とは違う絵付けを志向していました。

でも、技が途絶えてしまうという危機感から同じ仕事をする決心をしました。

訓練のおかげで、商品としての形が整いました。母親の仕事を守るという使命感で、技術は確かにつながっています。

（手仕事フォーラム代表　久野恵一）